

平成三十年さくら祭

ご英霊の思いに 応えるために

忘れられた近現代史・占守島の戦い

北海道分割を阻止した男たち

しゅむしゅ

平成三十年四月
第四版

靖国神社

戦後の自虐史観から、日本人が知らなければいけない歴史を、封印され今日まで来ました。ご英霊はさぞ悔しい思いをされているのではないかと思うのです。

そんな思いからこの冊子を皆様にお届けしております。私はジャーナリストではありませんし、歴史家でもありません。田舎の神職です。真実を調査する資金もありませんし、ネットワークもありません。只々市井の図書等から、マスコミが取り上げない歴史を皆様に紹介したいと思えます。

日魯漁業といえ、いまは名前が変わって株式会社マルハニチロです。魚介類の缶詰や冷凍食品などで、みなさんおなじみの会社です。その旧日魯漁業の従業員二五〇〇人が、昭和二十年八月の終戦のとき、アリューシャン列島(千島列島)の先端、カムチャツカ半島のすぐ手前にあるしゅむしゅとう占守島(地図…七頁)にいました。なぜか、占守島には日魯漁業の缶詰工場があったからです。そしてその工場の従業員の中には、約四百人の若い女子工員も混じっていました。

終戦を迎えた昭和二十年の八月十五日から三日目の十八日の午前一時のことです。この占冠島に突然ソ連軍が、対岸のカムチャツカ半島から猛烈な砲撃をしかけ、奇襲部隊を上陸させてきました。宣戦布告もなしに攻め込んできたのです。

この島を守るのは、日本軍の堤不夾つみふさき貴中将率いる第九一師団でした。師団では、十五日の終戦を受け、武装解除の準備をすすめていたのです。ところが、将兵みんなそろそろ眠りについたかな、という午前一時、突然対岸のロパトカ岬からソ連軍が猛烈な砲撃をしかけてきたのです。

さらに追い打ちをかけるように、占守島国端崎の監視所から「海上にエンジン音聞ゆ」と急電がはいって来しました。

「これは危ない」と判断した日本軍は、島一面が濃霧に包まれた中で、急いで戦闘配備を整えます。

その間にも、

「敵輸送船団らしきものの発見！」

「敵上陸用舟艇発見！」

「敵上陸、兵力数千！」

等と、相次いで急報が入ります。

戦争は終わったはずなのです。やむなく第九一師団では、国端崎の砲兵、竹田浜と小泊崎の速射砲・大隊砲が協力して反撃を開始しました。

十八日明けには占守島北端に多数の上陸用舟艇を接近させ数千の兵力が上陸してきました。

占守島の竹田浜に展開していた部隊は小隊だけであり、たちまち包囲攻撃され激戦となります。

一方、占守島には、二千五百人の民間の社員たちがいるのです。しかもそのうち四百人は、女子工員たちです。激戦の中、第九一師団の参謀長らは、日魯漁業の女子工員のことを気遣います。



「このままでは、女子行員たちは必ずソ連軍に陵辱りょうじよくされ被害者がでる。なんとしてもあの娘たちを北海道へ送り返さなければならぬ。」すぐに配下に命じ、島にあった二十数隻の漁船に女子工員約四百名を分乗させ、霧に覆われた港から北海道に向けて出港させます。

戦闘は激烈を極めました。

圧倒的なソ連軍二万に対し、北部の大隊はわずか六百、物量に飲み込まれ、全滅する部隊も続出、ソ連軍の上陸を許してしまったころ、濃霧の中で南部から時速六十キロで駆けつけた援軍の戦車隊が間に合い、日本軍はソ連軍を再び押し返すことに成功するのです。

この戦車隊こそ、かの池田末男率いる十一連隊でした。

「断固、反撃に転じ、ソ連軍を撃滅すべし」池田戦車連隊の主力は天神山の麓に集結。

池田連隊長は兵士に問いかけました。

「諸子はいま赤穂浪士の如く恥を忍んで将来に仇を報ぜんとするか、あるいは白虎隊のように玉砕もって日本民族の防波堤となり、後世の歴史に問わんとするか、赤穂浪士たらんものは一歩前に出よ、白虎隊たらんものは手を挙げよ」

その言葉が終わる間もなく嘆声とともに全員の手が挙がりました。

池田連隊長は師団、旅団の両司令部に



占守島に残る当時の日本軍の戦車

「連隊はこれより敵中に突撃せん」とす。祖国の弥栄いやさかと平和を祈る」と打電します。そして敵部隊の中心部に突っ込んで行きます。

ちようどこの時、北千島特有の濃霧が戦場一帯を包み込みます。

そしてついに耐え切れなくなったソ連軍は多くの遺棄死体を残して竹田浜方面に撤退しました。

日本軍の死傷者約 六百名
ソ連軍の死傷者約三千名

そして第九一師団のもとに、女子工員たちが「全員、無事に北海道に着いた」との電報が島に届いたのは、戦闘終結の翌日のことでした。

日本軍の果敢な戦いに千島侵攻は食い止められました。現地の日ソ両軍間で停戦交渉が成立し、八月二十一日午後、堤師団長とソ連軍司令官グネチコ少将が会同して降伏文書の正式調印が行われました。そしてソ連軍の監視の下で武装解除が行われました。

このとき守備隊将兵は悔しい思いで言いました。

「なぜ勝った方が、負けた連中に武装解除されるのか」

占守島にいた将兵を含み約二万五千人の日本人は、武装を解いた後、上陸してきたソ連兵によって全員捕虜にされシベリアに送られます。

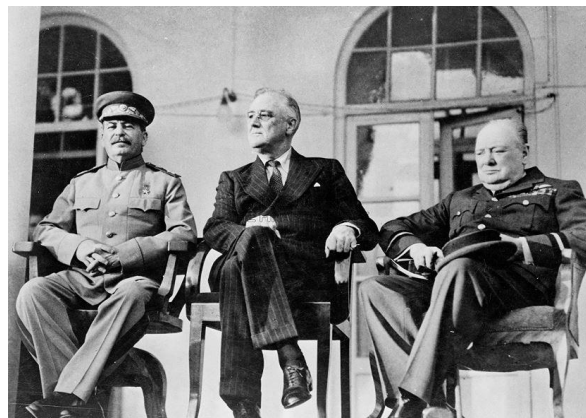
島を死守し、民間人を保護し、祖国を守って戦い抜いた男達は、戦闘終了後も帰国できるはずが連行され、極寒のシベリアで奴隷労働に従事させられ、寒さと飢えと栄養失調のために、約一割がシベリアの大地に露と消えました。

ようやく抑留から開放され、帰国した彼らを待っていたのは、世間の無関心と反戦平和の風潮で、占守島のことを知る人は全くいなかったのです。

それではなぜ、ソ連は、終戦三日後に強襲上陸進攻を強行したのでしょうか。



一九四五（昭和二十）年二月四日から十一日まで、クリミア半島のヤルタで米国大統領のルーズベルト、英国首相のチャーチル、ソ連首相のスターリンによる三カ国首脳会談が開かれた。これが有名なヤルタ会談です。会談でルーズベルトは、ソ連による千島列島と南樺太の領有を認めることを条件として、スターリンに日ソ中立条約を破棄しての対日参戦を促します。これが「ヤルタ密約」といわれるものです。

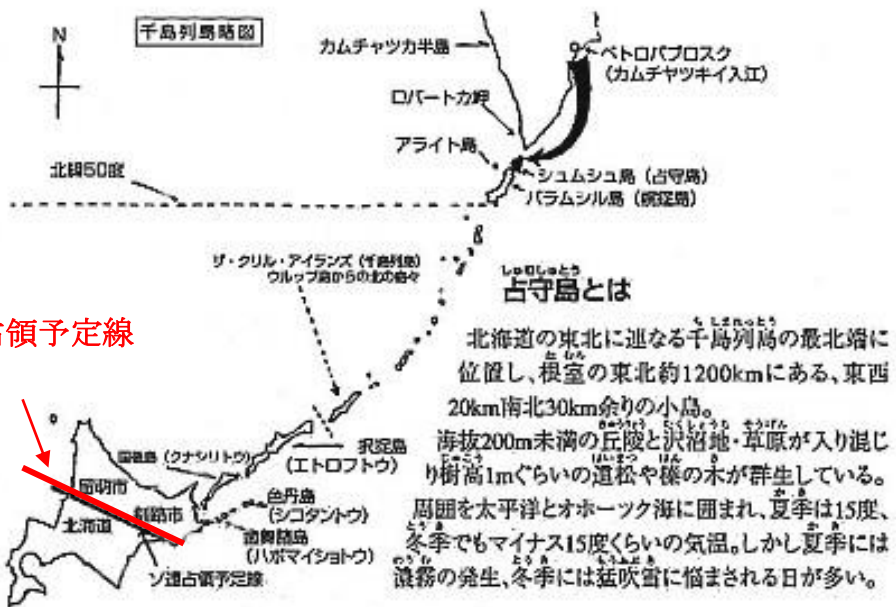


スターリン・ルーズベルト・チャーチル

ヤルタ会談の二カ月後、ルーズベルトは急死。副大統領から昇格したトルーマンは終戦工作を進め、トルーマンは八月十五日、スターリンに対し、ソ連が日本軍の降伏を受領する地域を規定した「一般命令第一号」を送付した。そこではソ連軍の占領地域は満州と北緯三十八度以北の朝鮮となっており、ヤルタ密約とは違つて千島列島は含まれていなかった。この内容を不満としたスターリンは翌十六日、直ちにトルーマンに次のような要求をするのです。

『日本軍がソ連軍に明け渡す区域に千島列島全土を含めること。これはヤルタ会談における三方国の決定により、ソ連の所有に移管されるべきものである。それに加えて北海道の北半分を含むこと。北海道の南北を二分する境界線は、東岸の釧路から西岸の留萌までを通る線とする。なおこの両市は北半分に入るものとする』

以上に対し、トルーマンからは『千島並びに北海道北部のソ連占領を認めない』という返事が十八日には届きますが、スターリンはそれを無視します。



と、此のように、まさに火事場泥棒。これはソ連、ヨーロッパの近現代史を、調べるとよく似た事例が散見されソ連伝統の狡猾なやり方です。

かように彼らは、日本がポツダム宣言を受諾した後の八月十五日からあわただしく戦争の準備し、奇襲上陸してきたのです。

このことは、ソ連が、もし千島侵攻がうまくいっていれば、一気に北海道まで侵攻し、領有しようとする意図があったということを示しています。さらにソ連は、たった一日で、占守島は占領できると、踏んでいたのです。ところが占守島の第九一師団は、そうした彼らの目論見を、見事に粉碎しました。敵をせん滅しかけたただけでなく、彼らを一週間に亘り島に釘づけにしたのです。

実は、この「一週間」が、北海道の命運を決定付けました。ソ連軍が占守島に釘づけにされている間に、米軍が、北海道進駐を完了させたのです。米軍の北海道進駐によって、北海道は、ソ連軍の侵攻を免れました。そのために、ドイツや朝鮮半島のように、北海道が米ソによる分割統治になるといふ事態が避けられたのです。

逆にいえば占守島第九一師団の勇敢な戦いがなかったら、北海道の南半分はロシアによって実効支配されていたかもしれませぬ。この激闘で、ソ連政府機関紙のイズベスチアは「占守島の戦いは満州、朝鮮における戦闘よりもはるかに損害は甚大であった。八月十九日はソ連人民にとつて悲しみの日である」と述べている。

さて、ソ連軍の侵攻を止めた、第九一師団の十一戦車連隊は、「戦車隊の神様」と言われた池田末男大佐が指揮していた。「十一」を合わせて「士」、通称「士魂部隊」と呼ばれた精鋭部隊で、池田大佐は、学徒兵には「健康を第一とし、具合が悪くなったらすぐに申し出よ」と気遣い、下着の洗濯など身の回りのことは全て自分で行なう四児の父でもありました。池田は身を切るほどの寒さの占守島で連隊長でありながら身の廻りの物の洗濯は自分でし、部下が「連隊長殿洗濯は私がしましょう」と申し訳なさそうにしていると「お前は俺に仕えているのか。国に仕えているのだらう」と言う硫黄島と言う栗林中将のような、部下に慕われる人物だったので。

池田大佐は、陸軍士官学校を卒業し、騎兵将校として満州方面で軍務に励み、その間に騎兵から砲兵に転換します。

そして「戦車隊の神様」と呼ばれる存在となり、陸軍戦車学校校長に就任します。

その後、第十一連隊長となります。まさに「士魂部隊」と呼ばれる精鋭部隊でした。ついには士魂部隊は寒さ厳しい占守島に転進を命じられます。

戦い終えて

ソ連軍の侵攻地における略奪、破壊はすさまじいものがあり、特に女性に対する陵辱は陰惨を極めた。ベルリンや満州では地獄絵図が繰り広げられた事を軍はよく認識しており、前述のごとくこの占守島にも、缶詰工場で働く約四百人の若い女子工員がいた。戦闘のさなか、占守島司令部は、島にあった漁船二十数隻に女性を乗せ北海道に移送した。戦闘を終了したソ連兵が血眼に



池田末男大佐

なって女性を探したが、女性達は無事に北海道に着いた後だった。間一髪のところであったのです。

家族と国を思い、侵略者から祖国を守って戦った彼ら戦士達のその勇気と信念を決して忘れてはなりません。

今、私たちは、何気なく北海道旅行とか、北海道の食べ物がどうこうと言っていますが、あの大地には此のような歴史があることを幾人の日本人が知っているでしょうか。もし、彼らの活躍がなかった、北海道は留萌く釧路に国境があったかもしれません。

戦後に生きる私どもとして、戦後の自虐史観の中で、封印されてきた北海道を守った戦士たち思いを、後世に伝えていくべき責務を持っていると思います。

読んで頂きありがとうございます。

追記

北海道の東には、終戦末期、以上のような歴史がありますが、西にも同じような歴史があります。それはソ連（ロシア）の歴史を学ぶと、欧州で引き起こされた戦禍の中にソ連の火事場泥棒のような残虐な行為があり、まさに同じようにその行為を当時の日本にも向けられたと言っているでしょう。日本が負けるとわかったら日ソ不可侵条約を、突如破棄して、参戦するのはソ連の常套手段です。

さて北海道の西で起きた火事場泥棒のような行為。それは、三船殉難の歴史です。此の事件は又の機会に皆さんに紹介したいと思います。



占冠島に残された日本軍の戦闘機(現在モスクワの博物館に展示) 当時7機が活躍。その1機である。

参考

旭日旗、征く 安芸一穂
オピニオンサイト いろんな
小名木善行 倭塾等より

万倉護国神社社務所
河本文夫